

「伝統」を考える授業

—— 日本事情教育の中で ——

徳井厚子

1 日本事情の中で伝統文化は必要か

—— 時間・空間軸から日本事情の範囲を考える ——

日本事情ではいったい「何を」扱うべきか、その範囲は現在かなり漠然としているのが現状であるが、これまでの日本事情教育の中では現代社会イコール日本事情、ととらえる考えも多く、伝統文化は軽視されがちであったといえる。日本事情において、伝統文化を扱う必要性はないのだろうか。ここでは、まず時間・空間軸という観点から日本事情教育で扱う範囲を考えてみたい。

わたしたちは現在、「今、ここ」という時間と空間の中で生きている。私たちをとりまく一番身近な環境（場面）は現代であり、今という時間であり、またわたしたちの現在住んでいる地域や日本（ここという空間）であるといえるだろう。こうした身近な日常生活や現代社会でおこっている様々な諸現象をとおして日本人の生き方、考え方について考えていくことは日本事情教育に必要であると考ええる。

しかし日本事情の範囲を考える際、時間的な軸を「現代」に限り、空間的な軸を「日本国内」に限定することは必要であろうか。石田一良は日本文化史の特徴について、次のようにのべている。「前代の伝統的な文化が新しい文化によって排除され、駆除されることなく、むしろ新しい文化の根底に発展させる基礎として捉え直されることから、変革期を含む両時期の文化に連続性が形成され、したがって日本文化の展開の全過程に一貫性が与えられるものと考えられる。この事実はさらに原始時代が後代の高度の文化のうちに残存し続けて、常に新しい文化によって研磨されてゆくという日本文化史の今一つの特徴につながっているように思われる。（略）さらに日本文化の発展法則は新・旧、固有・外来の両文化の並存が無秩序な累積と混乱一単なる重層性ないしは雑居性一を生ずるのではなく、前述のような矛盾的協働の構造関係を形成し、その後次々に伝来する外来文化がその文化構造体の諸肢節に手際よくうけいれられてゆくという事実をも説明するものである。そこには、日本人の驚くべき文化の総合力が示されている。」石田の主張は、日本文化を今という時点のみに限定せず、歴史的な幅広い時間軸の中からとらえ、また、空間軸では国内の文化のみだけでなく、国外の文化との関わりにも広げてゆく重要性を示唆したものであるといってもよいだろう。筆者も石田の捉え方を参考にし、日本事情の範囲を「過去・現在・未来という時間軸及び国外も含めたグローバルな空間軸」という視点から捉える。（図1参照）この捉え方は日本事情の範囲を現在、国内でおこっている社会・文化的現象のみとする（図1内側の円）捉え方では

なく、時間軸を過去・現在へ、さらに空間軸を国外へ広げた視点から捉えるものである（図1 外側の円）。

日本事情をこのようにとらえた上で、筆者は日本事情を扱う際、現代社会ばかりではなく、伝統文化についても扱う範囲にいれるべきであると考えます。

では、伝統とは一体何であろうか。伝統に関する一般的なとらえかたは「昔から続いている習慣・行事」であろう。しかし、例えば現在、伝統文化のひとつとされている歌舞伎にしても、もともとは「傾く」（奇抜なことをする）が語源であったように、歌舞伎が生まれたころには新奇なものであったのである。しかし、それが今日もおお多の人々に親しまれてきているのは、ただ川が流れるように続いてきているからなのではなく、常に新しい時代との「接触」がありその時間的な接触の中で「新たな力」として時代をつき動かしてきたためと考える。このように現在いわゆる「伝統」とされてきたものは時間という軸の中で常に新しい時代との「異文化接触」があったと筆者は考えている。（異文化接触という言葉は現在、空間的な意味で用いられている場合が多いが、筆者は時間的な意味にも広げたいと考えている。）したがって、筆者は本稿において伝統の定義を「新たなものを生み出し、時代をつき動かしてゆくような力」としたい。

また、本稿において筆者は文化をいわゆる文化遺産等、目に見えるものばかりだけではなく、人間の生き方など、目に見えないものも含め、「人間の生き方、考え方、及びとりまく環境」ととらえる。

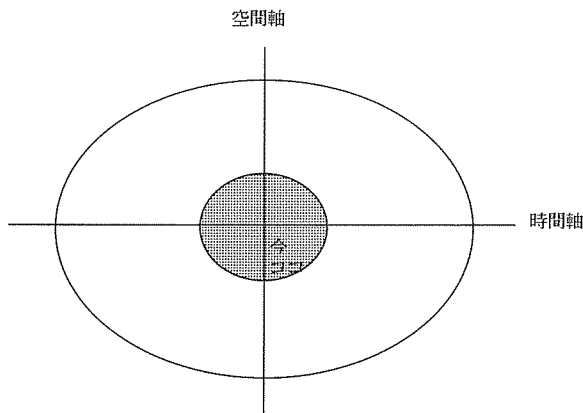


図1. 日本事情の空間・時間的範囲

2 「異文化接触と日本人」の授業から

2-1 「伝統文化」の授業における問題点と課題

では、留学生向けの日本事情教育の中で伝統文化はどのように教えたらいでしょうか。日本事情をどう学ぶか、について筆者は「異文化接触等、身近な出来事を出発点とし、人間の生き方、考え方、及びとりまく環境をとおして日本（人）とは何か、あるいは自己とは何

かについて考えること」ととらえている。

従来の留学生向け伝統文化の授業の問題点としては、以下の事柄が挙げられる。

まず、これまでの「伝統文化」の授業においては、「年中行事」等の「事象」を扱い「知識」中心の授業になりがちであることがあげられる。留学生に「日本の伝統文化という何が思い浮かぶか？」ときくと、例えば「生け花」「歌舞伎」等の答えが返ってくる。しかし大抵の場合、学生にとって「生け花」「歌舞伎」等は「日本紹介的」な知識として断片的に学んでいるにすぎず、歴史的なコンテキストの中で体系的なものとしては学んでいないといえる。

次に、伝統文化の授業の対象は、例えば美術作品、建築、演劇など「目に見える文化」の紹介にとどまりがちで、人間の生き方、考え方等「目に見えない文化」等はあまり扱われていないことがあげられる。文化を扱う際、目に見える文化ばかりではなく、人間の生き方、考え方にまで踏み込んでいくことは重要ではないかと考える。

さらに、伝統といえば「現代と切り離された、古いもの」と思いこまれがちであることがあげられる。伝統文化を現代とのつながりという視点から捉える事も重要ではないかと考える。

では、伝統文化の授業には、どのような視点が必要であろうか。

徳井（1997）では、日本事情を学ぶ一試案として単に事象を学ぶのではなく、人間の生き方、考え方へ追求していく方向性（Internalization：内在化）と、社会システム等、社会的な背景へと追求していく方向性（Externalization：外在化）の双方向が重要ではないかということを提示した（注1）。筆者は、伝統文化を学ぶさい、美術作品、建築、演劇など「目にみえる文化」のみに焦点をあて、これらの事象を「知識」として学ぶのではなく、それらの根底にある人間の生き方、考え方（価値観）にまで探求した Internalization の方向性が重要ではないかと考える。同時に日本人の生き方、考え方が「目に見える文化」にどのように反映しているのか探求していく Externalization の方向性も必要であると考えられる。

また、伝統文化を学ぶ際、それらを単なる個々の事物、事象としてとらえるのではなく、その背景である歴史的、文化的コンテキストの中で体系的にとらえていくことも大切ではないかと考える。

さらに、伝統文化を現代との関連から捉えてみることも重要ではないかということがあげられる。筆者は伝統とは新たなものを生み出す力であり、時代をつきうごかしてゆくものであると先にのべたが、この観点からみると伝統は現代と結びついているということができよう。筆者は伝統文化を考えると、「現代」の視点から捉えることも重要ではないかと考える。「伝統文化」の中に「現代人と共通した考え方」を見いだすという視点も重要であると考えられる。

また、異文化との関わりという視点からとらえてみることは留学生が伝統文化を学ぶ上で新たな示唆を提供するのではないかと考える。留学生が日本人学習者の場合と異なるのは学習者自身が異文化接触をしているということである。現在、伝統文化といわれている様々なものも「日本文化でもともとあったものは何か」「どのようにとりいれたか」「どのように加

工したか」という観点から捉えなおしてみると、異文化接触という新たな視点から伝統文化を切り込んでいくことができるだろう。留学生向けの「日本事情」の中ではこのような視点は欠かせないものではないかと考える。

これらの過程を通じて、伝統とは何かについて独自の視点をもちつつ「考える」力を養うことは大切ではないかといえる。

筆者はこうした観点から「伝統文化」を時間という軸で捉え、さらに「異文化接触」という空間軸を設定することによって「伝統とは何か」について考えていくための授業を行った。次章では実践報告を行う。

2-2 授業計画

筆者は、96年度の日本事情（日本の文化2）の授業において、「異文化接触と日本人」というテーマで行った。

ここではまず、96年度に筆者の行った伝統文化の授業のシラバスを提示する。なお、授業題目は日本事情（日本の伝統文化）であり、週1コマ（90分）計15回（半期）である。対象は全員留学生（学部1年生）である。学生数は30名であり、国籍は以下の通りである。

中国、台湾、マレーシア、ベトナム、パキスタン、ケニア、韓国、

（なお、第一回の授業と最終回の授業ではアンケートを行った。3章参照）

1	原始時代	自然と日本人 島国と海洋性	ビデオ「日本人と自然」
2	弥生時代	稲作という外来文化	
3		循環観 暦 冠婚葬祭 年中行事	読解「年中行事を科学する」
		年中行事の由来	ビデオ「年中行事と冠婚葬祭」
			読解「年中行事を科学する」
4	飛鳥・奈良時代	仏教という外来文化 聖徳太子	ビデオ「永遠の仏たち」
5	平安時代	漢字という外来文化かなの成立	百人一首ビデオ「源氏物語絵巻」
6		和歌、文学作品 主語の省略、婉曲表現、	
7	鎌倉・室町時代	禅宗という外来文化 わび、さび、 徒然草にみる美	ビデオ「日本庭園」
8	室町時代	武士文化との融合 能 書院造 風姿花伝	ビデオ「銀閣」 「水墨画」
9	安土桃山時代	西洋文化との出会い キリスト教、食の外来	
10	江戸時代	鎖国 歌舞伎、文楽	ビデオ「伝統演劇」

11	明治時代	外国人のみた日本 ワーグマン	読解「ワーグマン素描集」 ビデオ「キャラハンの生涯」
12		キャラハン（宣教師）	ビデオ「キャラハンの生涯」
12		ラフカディオ・ハーン怪談	読解「雪女」「むじな」
13		外国へいった日本人日系人	ビデオ「Moving Memories」

2-3 実践報告

1) 稲作という外来文化

ここでは、「稲作」という外来文化が入ってきたことにより、米を食べる習慣ができたこと、循環観という時間の観念に変化してきたこと、豊作を祈る祭りが生まれたこと等を扱った。

また、直接稲作の影響を受けているわけではないが、日本の「年中行事」の由来も異文化接触という観点から扱った。例えば「桃の節句」は中国の「曲水の宴」と日本古来の「祓え」が融合してできた行事であること、「七夕」は中国の彦星、織姫の星の伝説と日本の「祓え」と「畑作の収穫祭」が融合してできた行事であること等を扱った。「年中行事」や「米食」は「日本に古来からあった独特の習慣」と考えている人は多いのではないだろうか。しかし、このような考え方は日本事情の危険な落とし穴ではないかと考える。ここでは、これらが外来文化の影響を受けたものであることを示すことによって、「伝統文化はその国で生まれた独特のもの」という考えが一種の思いこみであったことに気づき、改めて「伝統文化とは何か」について考えるきっかけとなることを目的としている。

2) かなの成立

ここでは「漢字」がどのようにとりいれられ、日本語独特の「かな」へと変化させていったかについて扱った。まず、初めに簡単な文「私は学校へ行きます」を中国語と対照させ、（我去学校）どこが異なるかについて検討する。次に語順が異なる場合、どのように外国語をとり入れる方法があるかを考える。そして返り点、送りがなという古人のアイデアを紹介する。その後、万葉がな、ひらがな、かたかなの成立について述べ、どのように中国語が日本語へと変容していったかについてのべる。

ひらがなやかたかなは留学生が日本語を学ぶときにまず覚えなければならないが、成立の過程については学んでいない場合が多い。ここでは外来文化を摂取する古人の知恵を学ぶとともに、受け入れ、変容させてとりこむという一種の「異文化接触」のありかたについて学ぶ事を目的としている。

また、ここでは仮名をつかって自由に感情を表現ができることになった一つの例として和歌を取り上げた。例えば、防人の歌にみられる「父母が頭かきなで幸くあれていひし言葉ぜ忘れかねつる」等を扱い、古人の生き方、心情についてふれた。

3) 禅宗という外来文化

ここでは中国からの禅宗という外来文化が武士文化と融合し、「枯山水」「茶の湯」「生け花」「書院造」等、様々な文化が生まれたことについてふれた。これらはこれまで「日本の伝統文化を代表する日本独特のもの」として個々にとりあげられてきたことは多いが、歴史的なコンテキストの中で取り上げられてきたことは少なかつたのではないかと言える。コンテキストと切り離れた「事象」として別個にとりあつかうのではなく、社会、文化、歴史的コンテキストの中で扱う必要があるだろう。

また、「質素」なわび、さびなどの「目にみえない」文化と関連づける形で「枯山水」「茶の湯」等「目にみえる」文化をあつかう事も重要であろう。

4) 徒然草

ここでは徒然草の幾つかの段を紹介したが、この前に以下のようなアンケートを試みた。A 1) 家をつくる時、夏、冬どちらを過ごしやすい家をつくりませんか？ 2) あなたは3年ぶりに友人に会ったとします。あなただったらそのときどうしますか？ 3) 3, 4人で話をするときによい話し方とは？ 4) 月はどのような月が美しい？

これは、それぞれの段に関連する質問であるが、まず自分自身の考え方をふりかえるというプロセスを経て、兼好法師の考え方を学んでいこうとするものである。すなわち、現代人と共通するコンテキストの中で、兼好はどのように考えているのかについて考えるのがねらいである。古人といえば、現代とはかけ離れた遠い世界の人と考えがちであるが、このように空間的に類似した場を設定することにより、古典の作者をより身近に感じ現代人との共通点について知る事ができるのではないかと考える。

5) 西洋文化との出会い—食の外来—

ここでは食の外来について書かれたテキストを読む。テキストはカレーライス、てんぷら、ビール、アイスクリーム、コーヒー等、「はじめて味わった日本人がどう感じたか」について書かれたものである。ここでは従来「日本独特の食べ物」であるように思われがちであった「てんぷら」が実はポルトガル語が語源である事なども扱う。食の外来をとおして「伝統的なもの」と思いこまれていたものが「外来のもの」であったことにも気づくことを目的としている。また、「コーヒー」という語を例に、これらが留学生の母国語ではどのような外来語としてとりいれられたのかについても紹介しよう。

6) 外国人のみた日本

ここでは明治時代に日本へやってきた様々な外国人を紹介し、彼らがみた日本の姿、彼らの日本文化に果たした役割等について考える。まず扱ったのは「ジャポンパンチ」に様々な風刺画を掲載していたワーグマンの素描集である。日本人を何でもまねをする「オウム」にたとえる絵など、興味深い。彼の目をとおし、戸惑いながらも急速に西洋化していく日本の

様子を見ることが出来る。次に扱ったのは1870年代から80年代にかけて日本を訪れたお雇い外国人（ハーン、クラーク、モース、フェノロサ、ベルツら）である。貝塚を発見したモース、廃仏毀釈から寺院や仏像などを守ろうとしたフェノロサなど、日本の「伝統文化」に貢献した外国人は多い。「本の伝統文化」は日本人によって守り伝えられたもの、と考えられがちであるが、実はこのように外国人によって発見されたり、守られたものも多いのである。ここでは他にラフカディオ・ハーンの本観や怪談（むじな、雪女等）を紹介した。また、この時代日本に宣教師としてやってきたキャラハンのビデオも扱った。

7) 外国へいった日本人

ここではビデオ「Moving Memories」を使いながらアメリカの日系人たちの日常生活について考察した。このビデオは日系人のホームビデオであり、ピクニックや学校、家庭生活等様々な様子が見られる。授業では単にビデオをみるのではなく、ビデオにおける登場人物の行動を観察し、「日本的に思えるもの」「アメリカ的に思えるもの」を自分なりにみつけだすという方法を試みた（補足資料のアンケート回答参照）。筆者は文化を学ぶさい、このような行動面の観察も重要であると考えた。アンケート回答からは学生が鯉のぼり、制服等目にみえるものばかりではなく、集団行動、教育の方法、仕事の仕方等、行動面も観察をしているのがうかがわれる。ここでは海外へ出た日本人が異文化接触の過程の中でどのように影響を受けたのか、あるいは受けなかったのかを考える事を目的としている。

3 アンケートにみる学習者の伝統観の変容

3-1 事例

授業を通じて学生の「伝統観」はどのように変わったのだろうか。筆者は第一回及び最終回の授業の際に「あなたにとって伝統文化とは何ですか」という同内容のアンケートをとった。ここではこの2つのアンケートの結果の比較をもとに学生の「伝統観」の変容について考察する。

「あなたにとって伝統文化とは何ですか」

(1) 第1回アンケート結果（第1回の授業時）(2)最終回アンケート結果（最終授業時）

A(1) 日本の着物に関する事、日本の茶道、日本的な書道、日本の生活習慣、風俗。中国の場合では中国の京劇、詩、祭日 (2)伝統文化は決まった定義がないと思う。私にとって伝統文化は昔から今、遠い将来にも失われないものだと思う。ただし、普通の生活に大きな影響を与えているものだ。ひとつの民族は一つの伝統文化と思う。日本人の考え方、生き方、生活様式すべて伝統文化といえるでしょう。(中国)

B(1) kabuki, noh, kimono, samurai, お祭り, 俳句, 茶道, 書道, 生け花 (2) 伝統文化とは昔の人たちの考えを表していて、昔からずっとつづけているもの。例えば日本の場合空手、華道、相撲などは「礼に始まり礼に終わる」日本人の文化をよく表している文化だと

思います。(ケニヤ)

C(1) 日本：すもう 浮世絵，侍，花見，着物，歌舞伎，柔道，書道，生け花，剣道，台湾：正月，端午，中秋，三大節日 (2)伝統文化とは限られた地方や時間の中で生まれた特色があるものや習慣など，代表性のあるものになり，それが親から子へ，子から子孫へと伝えられ，保存されてきたものである。(台湾)

D(1) 衣装，仏教，食物，伝統的なお祭り，茶道，生け花，習慣，天皇，俳句，政治のやりかた，日本人 (2)伝統文化は民族意識，言葉では表現できない見えない結びつきだと思ふ。無意識で祖先がやっていたことをそのまま続けることはその伝統文化の本来性だと思ふ。(パキスタン)

E (1) 相撲，忍者，歌舞伎，庭園，建物，衣食住，祭り，浮世絵，風鈴，茶道，正座，書道 (2)ある社会で古くから受け継がれてきた風習や様式など目にみえるものから目にみえないものまで広い範囲にわたる。例えば衣食住は目にみえるものであって考え方は目にみえないものである。伝統文化はもともとの国内に生まれたものだけではなく，外国からとり入れたものを少しあらためて自分なりの伝統になるものもある。(マレーシア)

F(1) 昔から受け伝えてきた文化ということです。例えば，中国の京劇，日本の相撲，能，歌舞伎等を伝統文化といいます。そして，食文化，服装文化もそれぞれ国の歴史によって伝統的なことも残っています。風俗や習慣の中に伝統文化の影響も受け入れられているわけです。(2)伝統文化とは，昔から受け伝えてきた科学，芸術など精神の活動であり，人類の理想を実現し，自然を人間の生活目的に役立ていく過程でつくられた，生活様式及びそれに関する表現である。簡単にいえば「古い時代での人間の精神活動だ」と思います。例えば能，歌舞伎，相撲，俳句，短歌，祭りなどは「日本の伝統文化」と思われます。これらの伝統文化をとおして昔の日本人の生活様式，日本史等を理解することができる。加工はされましたが，文明の進歩の研究に価値がある。(中国)

G(1) 精神的に何を大切にしているか(習慣等) 現代になってどういうふうに着目して生かしているか?(2)伝統文化とは血の中に流れているある地域，ある民族の共通する考え方や習慣など，たとえば日本を例に挙げると歌舞伎や能などだけではなく，一般人が考えているひとつひとつが伝統文化だと考えている。一番大事なものは精神から生まれた日本的な思想，そこから生まれる様々なことに共有感を感じ，一体感をもたされ，現在まで影響を与えているすべてのものが私は伝統文化だと思います。(韓国)

3-2 考察

学生のアンケートをみると，同内容のアンケートであるにもかかわらず，受講前，受講後の学習者の伝統観がかなり変容しているのがわかる。以下では3-1であげた事例をもとにアンケートにみる学習者の伝統のイメージの変容をみてみたい。

まず，伝統文化とは何か，という問いに「茶道」「相撲」等「目に見える文化」を個別の事象としてとりあげた項目の羅列であるケースがかなり多くみられた(A~E)。あげられた項目は日本に焦点をおいた Culture specific な立場からのものがほとんどであり，互いに

関連性がなく、またコンテキストとの関連性もない。これらのイメージは留学生の母国で印象づけられた日本の「伝統文化」のイメージに類似しているのではないかと考えられる。

受講後は、受講前のアンケートと同じ質問であるにもかかわらず、ほとんどの学生が項目の羅列ではなく、文章で答えているのが際だった違いである。また、受講前に日本という特定の文化に焦点をおいた culture specific な立場からの回答がみられたのが culture general な立場から伝統というものを独自の視点から捉えようとしているものがみられた (A, C, D, E, F)。また、受講前には目にみえる文化しか考慮しなかったのが、受講後には目にみえない文化も意識して捉えたケースもみられた。例えば、E は受講前は「相撲、歌舞伎……」等項目の羅列であったのが、受講後には「風習や様式等目にみえるものから目にみえないものまで広い範囲にわたる」と変化している。また、D も受講前には単なる項目の羅列であったのが受講後には「伝統文化は民族意識、言葉では表現できない見えない結びつきだと思う。」と変化している。

また、「伝統とは何か」について学習者独自の深い洞察がなされているのがうかがわれる。例えば、B は、受講前は単なる目に項目の羅列であったが、受講後はこれら（例えば空手、華道など）の目に見える文化の背景にある考え方（礼）に内在化させた捉え方をしている。F は受講前は「昔から受け伝えてきた文化」と単に文化という言葉で説明しようとしていたが、受講後は文化の意味をさらに独自に考察し、「伝統文化とは、昔から受け伝えてきた科学、芸術など精神の活動であり、人類の理想を実現し、自然を人間の生活目的に役立ていく過程でつくられた、生活様式及びそれに関する表現である。」と具体的な捉え方がなされている。

伝統を静的なものとして捉えず、形成されてゆく動的なプロセスとして捉えたものもみられた。例えばC は「限られた地方や時間の中で生まれた特色があるものや習慣など、代表性のあるものになり、それが親から子へ、子から子孫へと伝えられ、保存されてきたもの」と捉え、G は「精神から生まれた日本的な思想、そこから生まれる様々なことに共有感を感じ、一体感をもたされ、現在まで影響を与えているすべてのものが私は伝統文化と思う」と捉えている。

このように、受講前、受講後の「伝統観」について、学習者に際だった変容がみられた。アンケートの結果、学習者は授業をとおして「伝統文化について何か」について深い洞察を行っていることがうかがえる。社会システムや文化遺産などと人間の生き方、考え方を双方向に内在化、外在化させることによって伝統文化を単に個別の「事象」としてとらえるのではなく、双方向のつながりの中から「伝統の意味」をみいだそうとしているのがわかる。また、独自の伝統観を見いだそうとしているものもみられたが、これもこの授業の重要な成果ではないかと考える。

4 終わりに

本稿では、日本事情教育の中で「伝統とは何かについて考える授業」の教授法の一例を提示した。日本事情教育の中で伝統文化を扱う際、これまで「歌舞伎」「庭園」など、目に

みえる文化遺産が多く扱われる傾向が強かったように思われる。しかし、単に事象として「紹介」するのではなく、現代文化との関わりも考慮しながら自ら内在化、外在化させていく力を身につけていくことは重要ではないかと考える。また、これらの事象を歴史的、文化的コンテキストの中で捉え、「伝統とは何か」について考え、学習者が独自の伝統観を構築していくような授業のあり方は日本事情における伝統文化の教授法としてひとつの視座を提供するのではないかと考える。さらに、伝統文化の授業を通して単に日本を対象とする culture specific な立場からのみではなく、culture general な立場から「伝統」について考えていく姿勢を養うことも重要ではないかと考える。

今回はその一例として、日本の伝統文化を「異文化接触」という観点から「伝統とは何か」について考える授業の試みの実践報告を行った。個々の授業の内容については稿を改めて論じたい。

謝辞：本稿をまとめるにあたり、研究会等で貴重なコメントを下された方々に深く感謝申し上げます。

注

1) 筆者は文化を「人間の生き方（態度など）、考え方（価値観、信念など）、及びそれらを取りまく環境（社会システムや文化的背景等）」と考えた上で次のように文化の重層モデルを考えた。まず、一番中心のコアに「人間の考え方」（価値観、信念等）、その次のレベルに「人間の生き方」（対人関係、態度、言語・非言語行動、規範、習慣など）、その次のレベルに「人間を取りまく環境」（社会システムや文化遺産など）が位置づけられる。そしてこれらは相互に関連しつつ「人間の考え方」を深層（核）とする重層構造をなしていると考え。さらにモデルをもとに日本事情を学ぶための一つの手がかりとし Internalization, Externalization の双方向を提示した。Internalization とは、「人間を取りまく環境」すなわち社会システムや文化遺産などの、一番外側のレベルから「人間の生き方」（価値観、信念）すなわちコアのレベルへと探求していく方向のことであり、Externalization とは、その逆の方向のことである。

筆者は日本事情教育の役割を考える場合、単に社会的事象や人間の生き方、考え方を別個に取り上げるよりむしろ、このように表層から深層へと探求していく方向性と、深層から表層へと探求していく方向性を養うことが必要ではないかと考えた。（徳井1997）

参考文献

- 石田一良 『日本文化史概論』吉川弘文館
太田雄三著1994 『ラフカディオ ハーン』岩波新書
東京外国語大学留学生日本語教育センター『留学生の日本史』
徳井厚子1997「文化モデルと日本事情教育」信州大学教育システム研究開発センター紀要第2号
永田久1989 『年中行事を科学する』日本経済新聞社
久松潜一他校注 1961『歌論集 能楽論集』岩波書店

補足資料

アンケート：「ビデオに見る日本的な部分とアメリカ的な部分はどこですか?」

回答 日本的 はJ, アメリカ的はAとして記す。

- (1) J 柔道着, 箸, 踊り, 麺, そろばんを使う, 制服, A服装, 挨拶のしかた, 拍手の仕方, 結婚式の様子 (ケニヤ)
- (2) J日本人学校の教育の仕方, A服装, 結婚式, スポーツ (野球, ゴルフ, サッカー) 住まいの広さ (中国)
- (3) J集団的な行動, お弁当が好き, 柔道, 国旗 A和服姿が見えない, 男女と一緒にゲームをする (中国)
- (4) J柔道, 箸をつかう, 日本人だけ集まる, 日本の遊びをする, A服装や行動が自由. 余裕がある。(台湾)
- (5) J仕事に対する熱心さ, お祭りの踊り, そろばんを使う Aナイフとフォークの習慣, 家の形, 教育がオープンで, 何でも子どもにさせてあげる, 結婚式, クリスマスのような祭日, アメリカ人らしいユーモア。(台湾)
- (6) J野球の応援のしかた, 鯉のぼり, 箸, 着物, 祭り, 相撲, 麻雀, 柔道, A オートメーション化したオフィス, 高い建物, 結婚式, 大きな車, 野球 (マレーシア)
- (7) J鯉のぼり, 相撲, 野球, 運動会, 日本人の自然を愛する部分 (山登りなど) Aダンス, 教会での結婚式, (中国)
- (8) J鯉のぼり, 俳句, 着物, 箸の取り, お箸を子どもに使わせる, 仕事のやりかた, 各自の考え, 子どもの育て方, 集団行動, 授業, 制服, おぼうさん, A日常生活, 服装, 仕事の内容, 職場環境, 背景の音楽, (結婚式はアメリカ的, でもその時の食事は日本的) (パキスタン)
- (9) A鯉のぼり, 柔道, 相撲, 子どもと親の運動会, お箸, 弁当, 仕事に集中 Bゴルフ, 野球, フットボール, クリスマスパティー, 洋服, 結婚式, タバコの吸いかた (マレーシア)
- (10) A帽子がすき, 入学式, 結婚式, 運動会, 制服, 国旗, うどん, 鯉のぼり, 弁当, 俳句, J建築様式, 庭での食事, 日光浴, キャンプをする, ラグビー (マレーシア)

(1997年11月17日 受理)